

論文審査の結果の要旨

論文提出者 中澤栄輔

記憶は、人間の認知システムの重要不可欠な役割を演じており、哲学においてはもちろんのこと、心理学や脳科学において重要な研究分野を構成してきた。本論文で、中澤氏は、記憶に関わる哲学的問題を心理学や脳科学の最新の成果を踏まえながら論じることによって、伝統的な記憶モデルに代わって「構成的分散的記憶モデル」という独自のモデルを提示することを試みている。本論文の特色は、過去の世界との直接的連関を強調する記憶の直接説の立場を擁護しながら、B・ラッセルの提唱するムネメ的原因という概念を用いて、心理学や脳科学における経験的知見に基づく議論によって、直接説に内実を与える記憶の具体的なモデルを提示することに成功している点に見出すことができ、この点に本論文の独創性を見ることができる。

本論文は、全体で5章からなる。第1章は序論、5章は結論であり、どちらも議論の前提と論文全体の概観が述べられているので、以下では主に、2章から4章の本論の議論を簡単に紹介する。

第2章は「記憶と代表象——記憶の間接説と直接説」と題されており、そこでは、記憶に関する代表的な哲学者の議論を間接説と直接説という軸のもので整理することがなされ、それによって、記憶の直接説擁護の試みがなされている。

伝統的な記憶観によると、記憶とは過去の経験の痕跡を貯蔵することであり、想起は、貯蔵されている痕跡にもとづいて過去の出来事のイメージないし表象を思い浮かべることと見なされる。この見方を支えているのが、記憶に関する(代)表象主義であり、同時に、過去から現在まで記憶像を保存する記憶痕跡という考え方である。このような見方は多くの論者に見られるが、代表的な議論としては、イギリス経験論の哲学者、J・ロックとD・ヒュームに見られる。どちらも、記憶とは、過去に知覚することによって得た観念を現在の時点で改めて心に再生する意識のあり方のことだと見なされる。そのために、想起している現在と過去の世界とは観念によって媒介されることになり、この見方は想起の間接説と特徴づけられる。

それに対して、哲学史のなかでは、T・リードが観念を用いたロックやヒュームらの見方を批判したことがよく知られている。中澤氏はこのリードの間接説批判にのっとなって直接説を擁護したうえで、E・フッサールの記憶理論を詳細に論じることにより、直接説に哲学的、現象学的な内実を与える。その際に重要なのが、ちょうど知覚において同じ対象をさまざまな空間的パースペクティブから意識するのと同じように、想起体験では、同じ過去の出来事を多様な時間的パースペクティブのもとで意識するという中澤氏独自の見方である。

第3章では、本論文の中心的テーマである記憶と因果の関係が論じられる。伝統的な記憶の表象説では、過去と現在が記憶痕跡を介して因果的に結びついており、記憶痕跡によって想起が可能になると見なされている点で、記憶の表象説ないし間接説は同時に記憶の因果説という仕方で理解されることが多い。そして、こうした見方のもとで、脳科学でも記憶痕跡を探し出す探求が継続されてきた。

それに対して、中澤氏は、記憶の直接説と統合的な因果関係を考えるために、ラッセルの提出したムネメ的原因という概念を用いることによって、伝統的見方とは異なった仕方の記憶と因果の連関を考えることを試みる。ムネメ的原因概念の特色は、伝統的な因果概念のように個別連続的な因果関係を想定する必要がなく、過去に起きた多様な出来事すべてが現在の記憶のあり方に影響するように考えることを可能にする点にある。この概念を用いることによって、伝統的な記憶痕跡概念のような個別的独立的な痕跡を考える必要のなくなることが示される。そのうえで、中澤氏は伝統的な記憶痕跡概念に代わって、「時間的に分散した記憶痕跡」という大変興味深い概念を提起する。そして、この時間的に分散した記憶痕跡概念に内実を与えるために、現在の生理学で用いられている神経ネットワークのコネクショニストモデルと長期増強という考え方を取り上げる。中澤氏によると、現在の脳科学で用いられている長期増強という概念は「時間的に分散した記憶痕跡」の実例として解釈することが可能なのである。ただし、現在の経験的研究状況では、この長期増強をめぐる議論は、下等動物の神経細胞のネットワークの形成という次元にとどまっており、人間の記憶に直ちに適応可能なところまではいまだ距離がある。それに対して中澤氏は、哲学者サットンの見方を参照して、人間の記憶に関しても、記憶は時間的に離れた多様な要因によって構成されるという「構成的分散的記憶モデル」を提示する。この「構成的分散的記憶モデル」によって、人間の記憶も含めて、記憶の直接説を擁護しながら、過去の世界との因果関係を理解可能にする見方が示されることになる。この3章で示された「時間的に分散した記憶痕跡」という概念や、それと連関した「構成的分散的記憶モデル」は中澤氏独自のものであり、これらの点に本論の独創性が集中的に現れている。

本論最後の第4章では、この「構成的分散的記憶モデル」をさらに説得的なものとするために、偽記憶ならびにPTSDのような固着する記憶という二つの種類の記憶が取り上げられる。

その際に参照されるのは、日常生活のなかでの記憶のあり方を重視したパートレットの記憶論であり、それを基礎にして展開されたナイサーやロフタスら、現代の心理学者による議論である。

ナイサーやロフタスらの見方によると、日常生活のなかでの記憶は、一度経験されたことが単独で保存され続けるようなあり方をするのではなく、過去から現在に至るまでの間に経験されるさまざまな要因によって影響を受けながら多様に編集され、構成されるあり方を示し、そのような過程ではしばしば偽記憶というあり方が生じることになる。こうした記憶現象は、ムネメ的原因というメカニズムによって記憶が生じるという見方を見事し

証明しているということができる。

他方で、PTSD のような固着する記憶現象は、一見すると、構成的分散的記憶モデルにはそぐわない現象のように見えるかもしれない。しかし、中澤氏によると、現在、研究されている PTSD に対する治療薬として開発され使用され始めているプロプラノロールの効果のあり方などを考慮すると、むしろこうした治療薬は、新たなムネメ的原因を追加することによって記憶のあり方を改変する過程と解釈することができ、こうした現象も、必ずしも「構成的分散的記憶モデル」の反証例として見なされる必要はないことになる。以上のようにして、構成的分散的記憶モデルの妥当性があらためて確認される。

以上のような議論に対して、審査委員のなかからは、論文中で用いられた直接説や偽記憶といった概念が必ずしも十分明確でないという指摘などがなされた。本論文は、そうした点で改善すべき点を含んでいることは確かであるが、「構成的分散的記憶モデル」という独自のモデルを現代の経験科学の成果を十分考慮に入れて明快に提案している点で、本審査委員会は、本論を博士論文として十分な水準をクリアーしていると判断し、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。